

第18回 ちゅうでん教育振興助成（平成30年度）

報告書資料 復興支援 - 16

学校名・団体名	三陸&東海防災教育推進研究会“伝”
コース	団体研究
活動・研究のテーマ	「学校×地域」でつくる学びと防災・減災

〈三陸&東海防災教育推進研究会“伝”設立までの経緯〉

平成29年10月に豊川市立御津南部小学校教諭の原田三朗（現四天王寺大学教育学部教育学科准教授）と仙台市立北六番丁小学校の千葉教諭、JICA 防災教育担当専門家で名古屋市港防災センターの防災教育アドバイザーである近藤ひろ子氏（元愛知県小中学校教員として「学校・家庭・地域が連携した防災学習」に取り組む）、蒲郡市立大塚小学校の市川真基教諭（当時は愛知教育大学発達教育科学専攻 大学院生）が会合したことから設立に向けての動きが始まりました。

児童が「防災・減災に強いまちとは、絆が強いまち」ということを学び、6年生が企画・運営する地域貢献イベント仙台市立北六番丁小学校の『和・話・輪フェスティバル』の理念と内容のすばらしさに、原田と市川が感銘を受けるとともに、三陸地方の人たちの震災における経験を東海地方の人たちが学ぶことの重要性を強く感じました。また、防災教育の研究・発信をする近藤ひろ子氏に助言をいただきながら、東海地方で防災教育・防災活動を行う人々同士のネットワークづくりに取り組む必要性も感じました。そこで、星のまち仙台防災教育研究会を立ち上げた千葉教諭と高橋教諭等仙台市の教職員と東海の教職員や双方に関係する学識経験者のネットワークを作り、互い地域の防災教育や防災・減災に関する取組を発表し交流し合い、全国に発信する「三陸&東海防災フェスティバル“伝”」をH.30.2.17に名古屋学院大学で開催しました。参加団体からも評価が高く、三陸地方と東海地方の教職員と市民が学びを通してかかわり合い、学びの共同体として発展する可能性を双方が感じました。H.30.8.25に第2回フェスティバルを仙台で開催し、H.31.2.16に第3回フェスティバルを名古屋で開催しました。この取組を継続して、三陸と東海の教職員と学識経験者が連携し、それぞれの地域の学校と地域が連携した防災教育を充実させ、また広域の学びの共同体を作り、広く地域と連携した防災教育の発展に貢献するべく本研究会を設立しました。

〈活動・研究の意義〉

- ①「三陸&東海防災フェスティバル“伝”」を開催することで、防災教育・防災活動の取組を通してつながった三陸地方と東海地方の双方が、防災教育・防災活動の取組と可能性の豊かさについて発信し、学び合い、相互の防災・減災に生かしていくことを目指す。
- ②防災活動に取り組む多様な主体者だけでなく、防災活動に取り組もうとする多様な主体者を巻き込むことで、地域連携の取組を生かした「学びの共同体」を形成し、今後起こり得る災害に向けての備えを強化することを目指す。

〈活動・研究の報告〉

時期	活動内容	詳細	成果
2018年8月25日（土）	第2回三陸&東海防災フェスティバル“伝” IN 仙台	東北学院大学 土樋キャンパスにて、「基調講演」「ポスターセッション」「合唱」「パネルディスカッション」「気仙沼観光コンベンション協会語り部による語り」「Round Study」を行いました。	参加者数170名、ポスターセッションでは、保護者と一緒に参加した児童が発表するなど、大人だけでなく、子どもたちの視点からも「防災教育」の価値について迫ることができた。参加者と発表者など、年代や立場など様々な方々が同じテーブルで話し合う Round Study では、「待ったなし!」「人ごとにならない。自分の中で体験に変える。」「考える力」が中心キーワードとして残りました。

2019年2月16日(土)	第3回三陸&東海防災フェスティバル“伝” IN 東海	名古屋学院大学 名古屋キャンパスたいほうにて、「語り部(櫻井弘行氏の震災当時のお話)」、「ポスターセッション」「体験コーナー」「パネルディスカッション」「Round Study」を行いました。	参加者数138名、 第2回「三陸&東海防災フェスティバル“伝”」にてまとめられたメッセージをもとに、「自然災害のリアリティを学び、防災の輪を広げよう」を大会テーマに設定しました。 体験ブースでは、「VR地震体験」や「防災ゲーム」「救助用ジャッキ体験」「空気から作る水の試飲」「携帯トイレの使い方体験」「非常食体験」など、話を聞くだけではなく実際にやってみることで、直感的に防災の知識を取り入れるコーナーとなりました。
2019年3月	防災教育・防災活動の取組をまとめたパンフレット作成及び成果報告	三陸&東海 防災教育・防災活動パンフレット作成をしました。また、パンフレットを活用しての広報活動をしていきます。	第1回「三陸&東海防災フェスティバル“伝”」と第2回「三陸&東海防災フェスティバル“伝”」(IN 仙台)、第3回「三陸&東海防災フェスティバル“伝”」(IN 東海)の開催報告を兼ねたパンフレットを作成することで、具体的にどのような防災教育・防災活動が三陸&東海で行われているのか分かりやすく発信できるパンフレットを作成しました。パンフレットを広報として活用し、取組の価値の共有を図り、第4回(IN 三陸)への周知をねらいます。

<第3回三陸&東海防災フェスティバル“伝” IN 東海 イベント内容に関して>

今回のイベントでは、防災についての学習を「学ぶ」・「体験する」・「伝える」の3つの要素から構成されると捉えて、イベント内容を配置しました。「学ぶ」とは、語り部の話や防災活動に取り組む専門家の発表から、防災の知識を取り入れることです。「体験する」とは、話を聞くだけではなく実際にやってみることで、もっと直感的に防災の知識を取り入れることです。「伝える」とは、その学んだことを誰かに発信することで、ネットワークを構築したり、自分の学びを深めたりすることです。この3つの要素の中でも特に「伝える」の部分を重視しているのが、「伝」というイベント名に込められた思いでもあります。学んだことを自分のものだけで終わらせることなく、誰かに共有しネットワークを構築することで、それが今後も継続していくことが何よりも大切だと考え、イベントを企画しました。

イベント時のアンケートから、今回のイベントでは若い世代と大人との交流が行われたことが窺えます。特に若い世代である学生の参加数が多かったのは、東海地方の多くの学生団体に呼びかけを行い、ポスターセッションやボランティアスタッフとしてご協力いただきながら、イベントに参加していただいたためです。東海地方の学生だけでなく、東北学院大学の学生らにも参加いただき、互いに心を開き、深く交流をしていました。今回のイベントで「子ども・若い世代を防災に巻き込む」ことの重要性が話し合われましたが、このイベントを通じて出会った学生の間で、また新たな防災の取り組みが生まれていくことに期待したいと思います。

<第3回「伝」での新しい取り組み 成果と課題>

第3回「伝」で学んだことを参加者だけのもの終わらせるのではなく、参加していない人にもこの学びが広まるような仕掛けとして、メッセージカードを作成しました。カードの表側には、イベントに参加した人がイベントに参加していない身近な人へ向けて伝えたいことを書いていただきました。カードの裏側には、「伝」のFacebookアカウント・LINEアカウントのQRコードとメールアドレスを記載して、その伝える経験を通じて感じたことを、いずれかの媒体で投稿してもらえよう仕掛けにしました。このメッセージカードの仕掛けを通じて、イベントの参加者が今度は伝える立場となり、イベントに参加していない周りの人に対しても防災に関する気付きを得てもらえることを目指しました。

Round Studyの最後の部分で、参加者に対してこのメッセージカードを配布し、表側を記入していただきましたが、イベント終了後の「伝える」経験についての投稿はほとんどいただけませんでした。ただ、Round Studyのまとめやアンケートの自由記述からは、「伝える」の重要性に関するコメントをいくつもいただくことができ、「伝える」という取り組みの重要性はイベントに参加された多くの方で共有ができたといえます。改めて「伝える」ことを実行に移す困難さを痛感したと共に、SNSのアカウントとメールアドレスといった電子媒体のみの集計システムを見直して、今後のイベントへ繋げていきたいと考えます。

本研究会の三陸と東海の教職員による連携した継続的な活動を行うことで、双方及び広域のよりよい防災教育・防災活動の展開や実践者や研究者の学びの共同体づくりをすることができることが期待されます。「三陸&東海防災フェスティバル“伝”」の内容を充実させて実施することで、全国へ地域と連携した防災教育の価値を発信したいです。防災教育・防災活動を進める中で育まれてきた人々のかかわり合いを生かして、三陸や東海の双方及び広域の「地域の学びの共同体」を育み、根付かせていきたいです。この取組を通して、防災教育・防災活動が「人づくり」や「まちづくり」に貢献する可能性や豊かさを追究し、広く全国に発信していきたいです。